

1909(明治42)年
に青森—ロシア・ウラジ

オストク間が定期航路に
指定され、大阪商船の貨
客船「交通丸」が就航、
両港間の貿易が拡大する
ことになった。同年6月
の初航海には青森港から
52人の乗客とともに8・

次いで、10年に金田村
(現平川市)の小野長四
郎が朝鮮向けを、11年に
は弘前市の中畠義が香港
向けなど、次々と新規市
場を開拓している。また、
同年に県の販路拡張費補

5万トン時代へ 青森リンゴ輸出

4

7トントンのリングが積み込まれておおり、この年だけで
203トントンのリングが輸出されている。

同年に浅瀬石村(現黒石市)の北山一郎がウラジオストクに「青浦商会」
を開業し、海外に初めて販売拠点を設けることになった。定期航路開設が

その後、新規参入者も次々と現れ、12年のウラジオストク輸出者は、堀内民治郎、秋元彦三郎(以上青森)、藤本兼太郎、新谷貞之助、新谷久助(以

海外市场開拓



上藤崎)、佐藤富作、白名前が登場し、輸出量も戸商店(以上弘前)らの前年の倍となる561トントン

急激な輸出増加で早速価格暴落を引き起こしたと伝えられている。

以上が輸出開拓の先駆者たちの概況である。上

海の皆川洋行、ウラジオストクの青浦商会といっやや安定的かつ長期営業の会社が設立され、リング輸出が船出することになったものの、輸出量は

1903年、青森港で船積みされる中東ドバイ向

けの県産リング。本県では、1907年前後からりんご輸出の機運が高ま

り、商人らが次々と市場を開拓していく。

輸入国事情で量は変動

年にによって大きく変動した。

产地の豊凶によって产地価格が変動し、価格が高いと輸出が減少した。輸入国の政治的・経済的事情など不安定要素も多くのトップランナーが青森リンゴ輸出は極めて危険性が高いことを「青森県りんご百年史」で紹介している。現代の情勢そのままである。

1907年前後に輸出の機運が一気に高まり、取り組みが進んだ。何人かのトップランナーが青森リンゴの輸出をけん引してきたのではないかと考えている。次回以降は、そのうちの青浦商会と皆川洋行に迫ってみたい。

(県りんご輸出協会事務局長 深澤守)